

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 19 日現在

機関番号：35404

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2011～2014

課題番号：23402009

研究課題名(和文) タイに陸路で渡ってきた南アジア系及びミャンマー系移民：地域研究の新たな地平を拓く

研究課題名(英文) Reconsideration on the Historical and Contemporary Land-route Connection between South Asia and South East Asia

研究代表者

高田 峰夫 (TAKADA, Mineo)

広島修道大学・人文学部・教授

研究者番号：80258277

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 8,700,000円

研究成果の概要(和文)：タイの南アジア系移民3集団(1.北タイ在住バングラデシュ系ムスリムの子孫、2.「ネパリ」、3.南アジア系子孫であるビルマ系ムスリム)の調査を行い、南アジアと東南アジアとのつながりを探った。1に関しては移動ルートと祖先の出身地等を明らかにすることができた。また、2については、内部のサブ・グループの存在やタイへの移入時期の違い等を明らかにした。3についてはミャンマーの政治的事情により十分に調査できなかった。また、ミャンマー人移民労働者の調査からは、大規模・継続的に国境地帯から離れたタイ内部へ出稼ぎに出ている実態が判明し、従来の国境地帯中心のミャンマー系移民労働者研究のバイアスが明らかになった。

研究成果の概要(英文)：For the purpose of re-finding the relationship between South Asia and Southeast Asia, we have conducted a research project which studies three South Asian communities in Thailand; i.e. 1) Bangladeshi Muslim descendant communities in northern region, 2) 'Nepali' community, and 3) Burmese Muslims of South Asian origin. On group 1), their migration routes and their ancestors' villages were revealed. On group 2), it is revealed that a 'Nepali' category includes three different sub-groups and that their times of migration and the cause and process are different. As of the political problem in Myanmar, we could not deepen a research on group 3). At the same time, Fujita, co-leader of the project, headed another research group and investigates on Burmese migrant workers in Thailand. They revealed that there are successive flows of migrants to the heartland of Thailand, and this fact suggests the bias of the previous studies which paid too much attention to the border area.

研究分野：地域研究、社会学

 キーワード：タイ 南アジア ビルマ(ミャンマー) 陸路でのつながり 移民労働者 移民政策 バングラデシュ
ネパール

1. 研究開始当初の背景

(1) 地域研究や隣接諸分野で、東南アジアと南アジアは別個の地域と捉えられる傾向が顕著である。このため、両地域に関わる(またがる)社会現象・問題は、これまでさほど注目されなかった。日本のみならず、世界の南アジア研究側からも東南アジア研究の側からも、両地域間関係に関する研究は極めて限定的だった。

(2) タイにはインド系子孫のコミュニティがあることが知られており、彼らに関する研究はあったが、その焦点はシク教徒と一部のヒンドゥー教徒であり、南アジア系ムスリムやネパール系についての研究はほぼ皆無であった。

2. 研究の目的

(1) ビルマ(ミャンマー)を經由してタイに流入・定着している南アジア系の人々の、タイへの流入プロセスと、タイ国内での生活実態を解明することを狙いとする。従来、南アジアと東南アジアは別個の地域として取り扱われる傾向が顕著であったため、両地域にまたがる現象は研究の視野に入りにくかった。本研究は、南アジアからビルマ(ミャンマー)を經由してタイへ流入・定着している人々(バングラデシュ系ムスリム、ネパール系ビルマ人、南アジア系ビルマ・ムスリム)に焦点を当て、彼らの移動・定着の歴史的かつ現在進行中のプロセスを解明することで、南アジア世界と東南アジア世界の結びつきを具体的に提示することが主目的である。

(2) 同時に、彼らの存在を広くビルマ系移民の中に置き、タイにおけるビルマ系移民の全体像を描きなおすことも目指す。タイには多数のビルマ系移民労働者がいるが、彼らの生活実態、現状と問題点の解明は進んでいない。その点を明らかにする。

(3) ビルマ系移民・労働者と比較対照する形で、南アジア系ビルマ人ないし南アジア出身でビルマ経由タイに移動・定着した人々の移動のプロセス、実態等を総合的に把握・理解することを目指す。

3. 研究の方法

(1) バングラデシュ系ムスリムのタイ人コミュニティについては、コミュニティの主要人物に対して個別のインタビュー調査を実施する。特に彼らの移動経路、移動理由、移動と定着のプロセスを可能な限り探る。南アジア系ビルマ人(ネパール系ビルマ人及びビルマ・ムスリム)については、個別インタビューを試みる他、ネパール系ビルマ人に関しては、彼らがタイで独自組織を立ち上げているので、それに関する聞き取りも行う。また、ビルマ(ミャンマー)人移民労働者に関しては聞き取りを中心にし、移民労働者の法的地

位、就業実態、労働条件、生活条件、医療保健、教育、セックス・ワーカーの問題、等についての総合的な調査を実施する。

(2) インタビューは、研究協力者(タイ、ビルマ、ネパール、それぞれの地域を研究する専門家)の協力を求めつつ、タイ国内では主にタイ語での聞き取りを行う。また、聞き取りは、ベンガル語が通じる場合にはベンガル語、ネパール系に関してはネパール語、ビルマ系ムスリムにはビルマ語で実施する。ビルマ系移民・労働者については、使用言語はビルマ語になる。同時に、上記諸集団関連の関連諸語の文献を収集し、その読解・情報収集を進める。

4. 研究成果

(1) タイ北部のバングラデシュ系ムスリム子孫コミュニティに関連：

移動ルートの解明：当プロジェクトが解明した移動ルートは以下の通り。最初期のムスリムは、牛を放牧しながらの移動だったらしい。陸路を全行程徒歩で移動してきた可能性がある。次の世代は、英領末期、東部ベンガル(現バングラデシュ南東部)の港湾都市チッタゴンからラングーンへ船で移動し、ラングーンからはビルマ側の Papun、タイ側の Tha Tavan 経由で、メーサリアンへ行った。一部の人々は、その後、ホートを経由し、チエンマイへ移った。現在の北部各地のバングラデシュ系ムスリムの祖先は、ほとんどこのルートで来訪・定住に至ったと見られる。

祖先の出身地の解明：チエンマイのムスリムたちには祖先の出身地の情報が欠落していた。メーサリアン経由での聞き取り、バングラデシュのチッタゴン県最北部ミルショライ郡での調査の結果、複数の出身村を発見できた。さらに、同地での関係者への調査から、同郡でも最北部、フェニ川の下流域からビルマ経由で移民が流出した時期があったこと、流出はフェニ川の河岸浸食と関連があった可能性があること、フェニ川を挟んで対岸のノアカリ県(現フェニ県)南部からも移民を輩出したこと、等が判明した。また、一部の移民については、親族関係等も明らかにできた。これ等の点は移住の実態を知る上で最大の成果である。

メーサリアンの重要性：Suthep[2013]の研究では、タイ北部のバングラデシュ系移民は主にメーソートを經由してタイ北部に流入した、とされた。しかし、我々の調査から明らかになったのは、上掲の移動ルートであった。メーソートでの現地調査では第2次大戦後に至るまで同地はビルマ側との交流の方が圧倒的に頻繁であったことが明らかになった。他方、メーサリアンでの調査からは、同地を經由してタイ北部にムスリムたちが移動したことが確認された。さらに、19世紀

のイギリス人の紀行等からは、バンコクとチエンマイ間の交通に著しく問題があり、他方、チエンマイからメーサリアン経由でビルマ領モールメインとの間には確立したルートがあり、比較的短期間に移動できたこと、等が記されている。以上を勘案すると、Suthepの研究には明らかに限界がある。北部に関する限り、カギとなるのはメーサリアン・ルートである。

(2) ネパール系ビルマ人関連：

3つのサブ・グループの存在：「ネパリ」を自称する人々の中に、実体として3つの下位集団が含まれることを解明したのは大きな前進である。タイへの移入が早い順から記せば、A)タイ国籍のネパール人、B)ビルマ系ネパール人（正しくは、「ネパール系ビルマ人」であるが、彼らは *Burmese Nepali* と自称）、C)ネパールから直接タイに来たネパール人。内部の実態はこのような状態でありながら、彼らは「ネパリ」としての一体性を強く主張することも大きな特徴である。

3グループの特徴：上記3グループは、それぞれ特徴がある。A)の中核となるのは、英領ビルマ期の進駐ゴルカ兵で、ビルマ北部で除隊後、第2次大戦の混乱を避けてタイ国内に移入した。戦後、彼らがタイ国内に居住していることをタイ政府が「発見」した。現在、国籍上も統計上も、彼らは「タイ人」である。B)似たような背景からビルマに来たが、そのままビルマ北部に定住した人々がいる。彼らはビルマ独立後に市民権ないし国籍を得たが、一部がタイに出稼ぎに出て、長期滞在している。彼らは「ミャンマー国籍」保持者である。他方、近年の移入者は、多くが第3・第4世代の若者で、ネパール語能力が低い。C)近年のグローバル化と共にネパールから多数の人タイの観光地に出稼ぎに来ている。彼らは「ネパール国籍」であり、タイ語をほとんど解さない。以上のような違いから、彼ら自身は「ネパリ」としての一体性を主張するものの、タイ政府は、それぞれのサブ・グループに対して異なる姿勢で対応している。

(3) ビルマ系ムスリム関連：

彼らについては、タイ北部で広範な存在を確認できた。また、ビルマ国内での視察の結果、ビルマ南部に多数の南アジア系ムスリムが集中する地域があることは確認された。しかし、プロジェクト開始後にビルマ国内のロヒンギャに対する抑圧が強まったこと、ビルマ人の中でのムスリムへの不信等の結果、残念ながら、当初計画していた調査を進めることが困難になった。

(4) ビルマ(ミャンマー)系移民労働者関連：

タイに少なくとも200万人はいるといわれるミャンマー系移民労働者の全貌を明らかに

するのは難しい。初年度はメーソートで調査を行い、2009年の国籍証明手続きによる新制度が浸透し始めた状況下で、移民労働者のバンコク方面への移動加速化とそれを阻止しようとするタイ当局のせめぎあい明らかになった。しかし、その後の調査、特に2014年のミャンマー・モン州での調査は、メーソートに在住して低賃金で働くミャンマー人はむしろ例外的で、もっと大規模・継続的に、国境地帯から離れたタイ内部の高賃金を得られる地域に出稼ぎに出ている実態が明らかになり、従来の国境地帯中心のミャンマー系移民労働者の調査研究の限界とバイアスが明らかになった。

(5) 以上を通じて、歴史的にも現在でも、事前の予想以上にタイにおいてビルマ(ミャンマー)からの人の移動が大きい意味を持っていることが明らかになった。同時に、ビルマが南アジア世界と東南アジア世界との間で人の移動をつなぐ、いわば「回廊」となっていることも確認された。

<引用文献>

Suthep, Soonthornpasuch, 2013 (1977), *Islamic Identity in Chiang Mai City: A historical and structural composition of two communities*, Center for Ethnic Studies and Development, Faculty of Social Sciences, Chiang Mai University.

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計4件)

高田峰夫、ネパールからタイへ：現代の移住第1世代 - プークットの仕立て屋の事例 -、『*広島修大論集*』、査読なし、53-1、2012、pp.211-233
https://shudo-u.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=1928&item_no=1&page_id=13&block_id=28

藤田幸一・遠藤環・岡本郁子・中西嘉宏・山田美和、タイにおけるミャンマー人移民労働者の実態と問題の構図 南タイ・ラノーン の事例から、『*東南アジア研究*』、査読あり、50-2、2013、pp.157-210
<http://kyoto-seas.org/ja/2013/01/tonan-ajia-kenkyu-50-2/>

長田紀之、"Discovery of "Outsiders": The Expulsion of Undesirable Chinese and Urban Governance of Colonial Rangoon, Burma, c.1900-1920"、『*上智アジア学*』、査読なし、32、2014、pp.79-96
<http://repository.cc.sophia.ac.jp/dspace/handle/123456789/36546>

同、植民地期ビルマ・ラングーンにおける華人統治 追放政策の展開を中心に、『華僑華人研究』、査読なし、11、2014、pp.18-37

〔学会発表〕(計 10 件)

Mineo TAKADA、" 'Nepali' to unite, 'Nepali' to survive: A strategic behavior of an ethnic minority community in Thailand", 第86回日本社会学会全国大会(慶應義塾大学、2013年10月12日)で発表。

森本泉、「移動をめぐる社会空間の変容 - ネパール北西部マナンを事例に - 」、第26回日本南アジア学会全国大会(広島大学、2013年10月6日)で発表。

Mineo TAKADA、" From Butwal to Phuket: A consideration on narrative of a Nepali tailor shop owner serving to the Western tourists", at "International Symposium on Designing Governance for Civil Society", Center of Governance for Civil Society, Keio University, Tokyo、2013年2月10日開催、招待発表

Mineo Takada、" Nepalis in Thailand: A Comparative Study", 'International Workshop on "Reconsideration of the Historical and Contemporary Land-route Connection between South Asia and South East Asia"', 8th -9th March, 2014, Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University

Dr. Srawut Aree, "Ethnic Diversity and Muslim Affairs in Thailand", 'International Workshop on "Reconsideration of the Historical and Contemporary Land-route Connection between South Asia and South East Asia"', 8th -9th March, 2014, Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University

Tadayoshi Murakami, "Pathans (Pashtuns) in Northern Thailand", 'International Workshop on "Reconsideration of the Historical and Contemporary Land-route Connection between South Asia and South East Asia"', 8th -9th March, 2014, Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University

Noriyuki Osada, "The Indian Connection: Some Aspects of Trans-regional Migration in Colonial Rangoon", 'International Workshop on "Reconsideration of the Historical and Contemporary Land-route Connection

between South Asia and South East Asia"', 8th -9th March, 2014, Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University

Takahiro Kojima, "Movement of Buddhists between China and Myanmar", 'International Workshop on "Reconsideration of the Historical and Contemporary Land-route Connection between South Asia and South East Asia"', 8th -9th March, 2014, Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University

Miku Takeguchi, "Inclusion and/or Exclusion of 'Aliens' in a Modern State: A Case Study of CLM Workers and Their Families in Thailand", 'International Workshop on "Reconsideration of the Historical and Contemporary Land-route Connection between South Asia and South East Asia"', 8th -9th March, 2014, Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University

Mineo TAKADA、" Bangladeshi Muslim Descendant Community in Northern Thailand: Historical connection to their ancestral land and their migration routes (Revised version)", at "A Seminar on "Muslims in Transition"', 10th Sep., 2014, Muslim Studies Center, Institute of Asian Studies, Chulalongkorn University, Bangkok, Thailand (招待発表)

〔図書〕(計 2 件)

高田峰夫、「バングラデシュ」、立川武蔵・杉本良男・海津正倫編『朝倉世界地理講座 - 大地と人間の物語 - (4:南アジア)』朝倉書店、2012、pp.252-264

高田峰夫「人々を結びつけ隔てる - タイ北部のムスリム・コミュニティに見るイスラームの力と限界 - 」、鈴木正崇編『森羅万象のささやき - 民族宗教研究の諸相 - 』風響社、2015、pp.143-163

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：

発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等：なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

高田峰夫 (TAKADA Mineo)
広島修道大学・人文学部・教授
研究者番号：80258277

(2) 研究分担者

藤田幸一 (FUJITA Kouichi)
京都大学・東南アジア研究センター・教授
研究者番号：80272441

(3) 連携研究者

なし ()

(4) 研究協力者 (氏名のみ、順不同)

長田紀之(OSADA Noriyuki)、
Dr.Srawt Aree、
竹口美久(TAKEGUCHI Miku)、
和田理寛(WADA Michihiro)、
山本真弓(YAMAMOTO Mayumi)、
森本泉(MORIMOTO Izumi)、
小島敬裕(KOJIMA Takahiro)、他。